改善しても定期的治療

大阪市西淀川区の男性会社員(39)は幼い頃からアトピー性皮膚炎で、20か所近くの医療機関で治療を受けてきた。ステロイド薬の塗り薬を処方されたり、されなかったりと、治療法はバラバラ。使う場合も湿疹が出た時だけと指導された。

全身に広がる湿疹を人に見せるのが嫌で、中学からは水泳の授業を休んだ。特に背中のかゆみは強烈で、痛みでかゆみを忘れるため、ハサミの先端で何度も背中をこすった。

冬の乾燥する時期には、頭に触れると頭皮がふけのように大量に落ちてきた。体をかくと、皮膚がぽろぽろ剝がれて床に散乱した。

2014年6月に大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター（羽曳野市）を受診。皮膚科主任部長の片岡葉子さんは、全身に広がる湿疹を最重症のアトピー性皮膚炎と診断し、入院を勧めた。重症度の目安となる血液中の「TARC」は、1万257だった。

TARCは、炎症を増幅させるたんぱく質の指標。成人の場合、通常は500以下で、3000以上は重症とされる。

男性は湿疹が改善すると自己判断でステロイド薬の使用を中断して、症状がぶり返していた。片岡さんは「炎症の火種がまだ残っている状態。しっかり消火するため治療をやめないことが重要です」と強調する。

見た目がきれいでもステロイド薬を定期的に使い、症状の再発を予防する治療はプロアクティブ療法と呼ばれる。有効性を示す報告も多く、アトピー性皮膚炎治療の主流になりつつある。

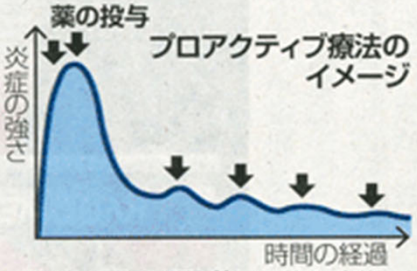
TARCは、このプロアクティブ療法の効果を高めるのに役立つ。500以下に下げる目標を患者に示し、皮膚の状態を見ながら、ステロイド薬を使う頻度を徐々に減らす指導をする。

男性はその後、本格的な治療のため入院。5段階で2番目に強いステロイド薬と保湿剤を朝と晩の2回、顔には免疫抑制剤のタクロリムスを塗るよう細かく指導された。湿疹は随分改善し、TARCは一時700台に低下した。

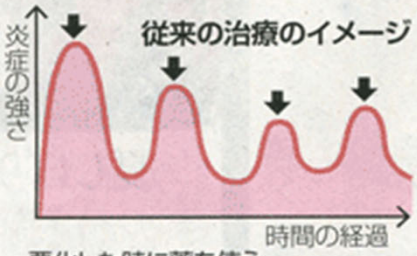
ステロイドを使う回数を徐々に減らし、今はしつこい炎症が残る背中は2日に1回、それ以外の部位は週1回になった。

これまで妻(37)や小学2年の長女(7)がプールや海に行きたがっても諦めていたが、今年の大型連休中には、初めて家族で温泉旅行を楽しんだ。男性は現在、症状のない状態を維持できている。だが、TARCは1000前後で、もうしばらく治療を続けることが必要だ。

男性は「これからも気を緩めずに治療を頑張り、いつか家族で海水浴に行きたい」と話す。



治療で湿疹が改善した後も定期的に薬を使い、無症状の状態を長期間維持する



悪化した時に薬を使う

「病院の実力　2015総合編」が発売中。一般書店と読売新聞販売店で扱っています